

健康だより

乳がん検診を受けましょう

日本女性の乳がんは欧米に比べ、閉経前が多いのが特徴です

乳がんは、日本では戦後急激に増加し、年間約9万7千人が発病し、1万4千人が命を落としています。

日本女性の特徴は、欧米と異なり、閉経前の乳がんが多く、40代後半に最も頻度が高く、20代、30代でかかることも珍しくなく、家庭や社会で働き盛りを襲う疾患です。特に、肥満傾向、初潮が早く閉経が遅い（月経期間が長い）、初めての妊娠・出産が遅い、出産回数や授乳経験が少ない、乳がんの家族歴がある、良性乳腺疾患の既往があるなどの人がかかりやすい傾向にあります。

日本の検診受診率は先進国の中で最低です

マンモグラフィによる乳がん検診によって、乳がん死亡率を減らすことが科学的に証明されています。多くの先進国では、マンモグラフィによる乳がん検診が推奨されていて、アメリカやイギリス、フランスでは50代から70代の女性の約70%以上がマンモグラフィを受診しています。

一方、日本では、40歳以上のマンモグラフィによる乳がん検診の受診率は45%程度です。これは、先進国で最低の数字です。検診受診率が低いため、早期発見が遅れていて、先進国で唯一、乳がん死亡率が増加し続けています。

40歳以上の女性は、最低でも2年に1回、検診を受けましょう

マンモグラフィは、乳房を片方ずつ、X線フィルムを入れた台と透明なプラスチックの板で挟んで、乳房を平らにして撮影します。マンモグラフィで発見される乳がんの70%以上は早期がんで、乳房温存手術を受けることができます。

もしも、検診で「要精密検査」という結果が出たら、精密検査を必ず受けましょう。

乳がん検診後でも、しこりに触れた場合は、乳腺科や乳腺外来など、乳房疾患の診療を専門とする医師を受診しましょう。



参考：国立研究開発法人国立がん研究センター「がん情報サービス（がん種別統計情報・乳房）」
厚生労働省研究班監修 女性の健康推進室ヘルスケアラボ「乳がん」「乳がん検診」
厚生労働省 第39回がん検診のあり方に関する検討会「がん検診の国際比較 乳がん検診」